

鳥たちの河口

鳥たちの河口

野呂邦暢

文藝春秋刊



鳥たちの河口

昭和四十八年九月三十日 第一刷

定価九五〇円

著者 野呂邦暢

発行者 桧原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二一三
郵便番号一〇二

印刷 精興社
製本 中島製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

著者略歴

昭和12年長崎市生れ。長崎県立諫早高校卒。

本名納所邦暢。

「或る男の故郷」にて第21回文学界新人賞佳作。

表題作「鳥たちの河口」は第69回芥川賞候補作品。

〈著書〉海辺の広い庭（文藝春秋刊）

〈現住所〉長崎県諫早市仲沖町658（〒854）

〈鳥たちの河口〉 目次

鳥たちの河口

5

四時間

57

世界の終り

99

ロバート

147

棕櫚の葉を風にそよがせよ

175

装帧
山口威一郎

野呂邦暢第三創作集

鳥たちの河口

鳥たちの河口

男はうつむいて歩いた。

空は暗い。

河口の湿地帯はまだ夜である。枯葦にたまった露が男の下半身を濡らす。地面はゆるやかな上り勾配をおびて地下水門のある小丘へつづく。

男は肩にかけた鞆を右腕でおさえ、目的地をわきまえた者の確信をもった足どりで丘をのぼる。原野の果て数キロのあたりに市街地の燈火が見える。街は眠っている。

星のない空をいただいて枯葦の原は一樣に色彩をうしない、黒い棘のかたちでひろがっている。丘のいただきにたどりついたとき、視界がひらけた。風が吹いてくる。海からの微風である。男は深呼吸をした。風は干潟の泥を匂わせた。

海には朝の兆しがあった。

すでに空と水平線が接するところは鮮かな一線が認められ、ほのかに白くなって雲のうしろに隠れた太陽を暗示している。風は一定の強さで海から干潟をこえておしよせ、たえず葦の葉をざわめかせた。

男は丘のいただきで立ちどまらなかつた。まっすぐ海へむかつておりた。風に潮の香がまざつた。男は足もとに目をこらして歩いた。浅い水たまりはそのまま踏みこみ、せまい流れはとびこえた。やや幅の広い水流へさしかかつた。男は背をかがめて流れの一箇所にかけて渡した板を確認した。こわれた船材である。黒ずんだ水が海から逆流し、ひたひたと枯葦の根を洗う。潮が満ちる時刻だ。

用心して橋をわたり対岸に足をおろそうとしたとき、男を支えていた板が折れた。鞆をかかえてひととびに跳んだ。男は水ぎわでころんだ。その瞬間、鞆を胸元にひきよせて抱きしめ衝撃を与えまいとした。すばやく手をついておきあがる。目の前に一羽のカモがころがっている。いぶかしげに眉根をよせてみつめる。ひろいあげて死因をしらべた。

のどから腹にかけてひきむしつたように皮が裂け、肉がえぐられている。はみだした暗紫色の内臓に鼻を近づけた。まだ新しい。腐敗臭はなかった。鋭い鉤のようなもので裂いたとは思えない。ハンターの仕業とは思えなかった。何か荒々しいものがカモをとらえ、死に至らしめたようである。

男は窪地にカモを横たえ、枯葦を折ってかぶせた。(何がカモを殺したのだろう。)野犬は町にいて餌のとばしいこの原野をうろつくことはない。かりに飢えた獣が出没するとしても、鳥が地

上でおそわれて殺されることはありえない。しかしカモの死骸は湿地帯のどこかに何か兇暴な力のひそむことを教えた。枯葦がひとすじ道のかたちに踏みしだかれ海へつづいている。渚へ近づくとつれて生臭い魚の匂いが濃くなった。

男は歩幅をひろげた。

今はうつむかずに目的地を見すえて歩いた。かるく息がはずむ。鳥のくちばし状に干潟へつきでた小さな岬がある。枯葦はまばらになった。岬のはずれに砂丘があった。そのふもとに半ば傾いた板小屋が立っている。

男は小屋につまれた空樽の一つから折りたたみ式のキャンバスチェアをとりだした。砂丘の上にはコの字形の囲いがこしらえてある。砂に板を立て、その隙間に葦の束をさしこんだ風よけは男が造ったものだ。開口部は海に面していた。その中にキャンバスチェアをおいた。鞆を膝にのせてジッパーをあける。慎重に器材をとりだした。

まず三脚を砂地に固定する。別のケースから千ミリの望遠レンズを出して三脚に装着する。カメラをとりつけ、ファインダーがしゃがんだ男の目にくるようにねじを調節した。寒気が肌を刺した。男は手に息を吹きかけた。指がかじかみ、ねじをまわすのもままならない。

沖にレンズをむけてのぞいた。手をこすり合せながら目をこらした。黒い円盤状の水がどっしりとレンズのむこうにひろがっている。空は灰色の光をはらみ、海の色をさっきより濃くしたようだ。夜明けが近い。男はレンズを右から左へ、左から右へゆっくりとまわして海をしらべた。見なれた光景である。きのうと同じだ。海は朝の色をしだいに回復しつつあった。

立ちあがって双眼鏡で干潟をながめた。泥の上にはおびただしい鳥が休んでいた。一羽の水禽が上昇した。チドリである。その一羽に誘われて五、六羽が、次に十数羽が舞いあがり、砂粒を撒いたように空をとびかった。空が明るくなるにつれ、ココア色の軟泥と入りまじって区別つきかねた水が見わけられるようになった。

チドリの飛翔には法則がなかった。不規則な分子運動に似た上昇と下降をくりかえす水禽の群を双眼鏡の視野にとどめておくのはむずかしかった。男の手が動かなくなった。転輪をひねり、焦点を干潟の一角にあわせようとした。何か見れない鳥を認めたような気がする。ほの白い東の空を背景に異様な鳥がかすめたようである。

目標の位置を見定めておいて三脚付カメラに走りよった。レンズに目をあてて干潟の一点でちらちらと動くものをとらえようとする。高倍率レンズの視野はほの暗く、まだ明けきっていない干潟を凝視するにはあまりに不安定だ。男はレンズから目を離れた。未練ありげに黒い杭の立ちならんだあたりに目をこらす。もはや何もそこで動く気配はない。男は鞆からビニールでカヴァーをかけたノートをとりだしてカメラのわきにおいた。

砂丘をおりて渚にうちよせられた漂着物の堆積から燃料になるものをひろいあつめる。風よけの背後にきのうの焚火跡が黒く残っていた。板小屋にたくわえておいた枯葦を運んだ。流木をえりわけて火つきの良さそうなものを枯葦にのせた。草は湿っていた。五、六本のマツチが無駄になった。男の目がノートにおちた。ちょっと考えたあとでノートをとりあげ、ページをめくってまだ書きこんでいない白紙をぜんぶ破りとった。それをまるめて枯葦の下におしこみ、マツチを

すった。焰があがった。茶褐色の茎は白い煙を吹きだしてくすぶり、男の目に涙をにじませた。

焚火からはなれて目をぬぐった。よごれた古毛布色の雲がたれこめている。上空は風が強いらしく、乱れた雲の塊がそろって南東へ動く。(雨になるだろうか?) 風向と鼻孔の粘膜で知る大気の湿度によって男はその日の天候も推測できるほど土地の気象に敏感になった。焚火へもどろうとして何気なく空を一瞥したとき、げげんそうに眉をひそめた。

鳥のようなものが雲のかげをかすめたようである。杭のある干潟で認めた鳥とはちがっていた。鳥にしては大きかった。目のすみでちらととらえた影像にすぎなかったが、なにがなし不吉な印象をうけた。カモの死骸を思いだした。鋭い牙のようなものでえぐられた腹の傷が目にかんだ。

しかし雲のふちをかすめた物体は一度だけ男の視界でひらめいたきり消えてしまった。男は焚火のそばにしゃがんだ。火は流木に燃えうつり橙色の焰となって男の顔を染めた。煙はまっすぐに立ちのぼり、男の身のたけの高さで斜めにかしぎ、陸地へなびいた。こやみなくおこる微風のために枯葦の茎はおたがいに摩擦しあい針金をかき鳴らすように鳴った。男は家からここへ運んでくるはずの物を忘れたことに気づいた。

血のめぐりの良くなった手で顔をこすりながら砂丘の上を歩きまわった。檻の獣のように往復した。そうしていなければ寒気が鎌をもみこむように身体の芯に喰い入り感覚をしびれさせるようである。ようやくあたたまったところでキャンバスチェアにもどり、望遠レンズで海をのぞいた。海は干潟にふちどられ、夜明けの光をあびてうす墨色から青銅色に変貌しようとしている。水平線に細長いものが動きまわっている。

鏡胴をひねって焦点をそれにあわせた。それは陽炎をすかして見る影のように不確かにゆらめいていたが、やがて船の輪郭をとった。漁船はそれぞれ船べりに一つの燈火をかがけていた。薄明の空と海の間でそれらはみな一様に淡い透明な光を放つだけだ。散開していた漁船の群は湾口で円を描いて一列になりへさを河口へむけた。満潮を利用して船団は河口をさかのぼり、その奥の小さな船着場へ帰ることになる。

海は干潟に侵入し、そのゆるやかな起伏をいっそうなめらかにした。まだ水に侵されない干潟は朝の光がおりてくると象の皮膚に似た単調な色彩が濃淡さまさまの茶褐色で映えた。太陽は水平線をはなれたらしい。柔らかい泥のひろがりや空の明りを反映して海獣の肌のようにつややかな光沢をおびた。

干潟が海へ沈下するにつれ水のせせらぎとも小魚のはねる音ともつかないかすかなつぶやきがおこり、何か湧きたつようなものの気配がたちこめたようである。ついに干潟は水面と一致し、海は豊かになった。男は河口をめざす漁船団にレンズの焦点をあわせた。先頭の船で黒いセーターの男が舵をとっており、砂丘に接近したところでレンズの方をむいて手をふった。何か叫んだようだが声はききとれない。男も黙って手をふった。

河口に達した船はそこで速度をおとし、砂州に攔坐した廃船の残骸を迂回して蛇行しつつ上流をめざした。けさの漁獲はとぼしかったと見えてどの船も吃水は浅かった。船は浅瀬の多い河口でいっせいに機関の回転をおとし航路を示す標識ブイの間へのり入れ、先行する僚船と一定の間隔をおいて葦のしげみへ没してゆく。

最後の漁船が見えなくなってからもしばらく葦原の奥からまのびしたエンジン音がひびいてきた。やがてそれも絶え、河口はもとの静寂にかえった。男はふたたび望遠レンズを干潟にむける。太陽は依然として雲の彼方にあり、にぶい白銅貨の光でぼんやりとそのありかを告げているにすぎない。

男はさっき見えない鳥が動いた杭のあたりを望遠レンズでしらべた。念入りにさぐった。一羽の鳥が餌をあさっている。(いた。)注意深くレンズの焦点をあわせた。はっきりとそれは十字線の中央にとらえられた。

(シギ? いや、ちがう)

鳥はひらりと杭にとまりくちばしで翼を梳いた。そこから河口の方へ舞いあがる。男はゆれ動くレンズの視野に鳥の姿を追い求めた。シギとは思えなかった。シギはこの湿地帯でありふれた鳥であり、秋らしい男には珍しい鳥ではなかった。シギよりも全体として白っぽい感じである。男はレンズの視野に鳥を見うしなってしまった。

双眼鏡で河口をさぐった。鳥は砂州に坐礁した廃船の上で旋回し、やおら折れたマストに翼を休めた。三倍の双眼鏡では二百メートル離れたこの砂丘からくちばしの形状まで観察することはできない。男は望遠レンズにもどった。ほぼ五分間、マストの周辺で羽搏く鳥を見まもった。こまかい所はしかと見とどけられないが、翼の裏の異様な白さが気になった。

鞆をさぐって小型の原色版鳥類図鑑をとりだした。シギ科の項をめくる。求めるページをさがしあて、その特徴を何回か読みかえした。ふたたび目を望遠レンズにあてる。廃船のマストに鳥

はいなかった。男はあわただしくレンズを動かした。肉眼で干潟を見まわす。あちこちに餌をといばむ鳥がふえた。

ツクシマガモの群が泥のくぼみに棲息する小魚や貝をあさっている。男は砂丘の端に歩いた。双眼鏡で廃船を中心に杭のかけや流木の堆積をさぐり、しだいに搜索範囲をひろげた。意外に近いうところにその鳥は来ていた。男の位置から百メートルと離れていない水ぎわに鳥はおりて、しきりに泥をつついてゐる。

鳥の姿を確認しておいて鞆にかけより三百ミリの望遠レンズをとりだすのもどかしく焦点をあわせた。こんどはくちばしから羽毛の色彩まで微細に見わけることができた。男は鳥のかたわらにあるブイの残骸とくらべて鳥の体長を目測した。三十センチ前後であるようだ。くちばしは細長くとがり、背中は干潟の泥とまぎらわしい灰褐色である。白い腹から短い黄がかった脚のびて体を支えている。男は目をばちばちさせ、ときどき指先で脛をこすって視力の疲れをいやした。

（アオアシシギ、でもない……。）鳥類図鑑に目を走らせて干潟の鳥と類似の項目をさがす。ついに求める説明をさがしあてた。（カラフトアオアシシギ、あれが、まさか……）

鳥は泥にさしのべた首をもたげ短く羽搏いたかと思うと海の方へ去った。翼をひろげて上昇するとき、その内側の鮮かな白色を男の目にやきつけた。その白さは女の腋窩に似ていた。カラフトアオアシシギの特徴である。

（ただ一羽だけでこんなところに？）